「獄中」からの手紙
～冤罪を訴えながら収監された元運転手の叫びを聞け～

高裁判決後の記者会見で無罪を訴える元運転手・片岡晴彦さん。現在加古川刑務所に収監されている

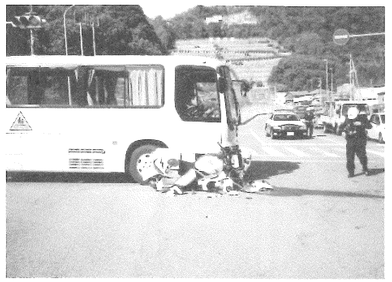
本誌既報の『高知白バイ事件』。「白バイとの衝突時、バスは停止していた」と主張し、無罪を訴え続けてきた運転手の片岡さんだったが、結果的に最高裁は上告を棄却し、実刑判決が確定。昨年10月、刑務所に収監された。あれから4カ月、今号は事件の最新情報と、獄中から柳原三佳のもとに届いた手紙を紹介したいと思う。

昨年10月21日、私は高知県仁淀川町の片岡晴彦さんのご自宅にお邪魔していました。刑務所への収監を2日後に控えたこの日の夜、近所の支援者らが集まり、「片岡さんを送る会」が催されていたのです。

2006年3月3日の事故から2年半あまり。当時スクールバスを運転していた片岡さんは、事故直後から、終始一貫「私は止まっていた」と主張していましたが、地裁、高裁、最高裁、いずれもその訴えを却下。「バスが安全確認を怠って国道に出て、白バイをはねた後、急ブレーキをかけて、倒れたバイクを3メートルも引きずった」

として、結果的に禁錮1年4カ月の実刑判決が確定しました。

この事件、テレビでもたびたび放映されているので、御覧になった方も多いのではないでしょうか。レストランを出て国道を右折しようとしていたスクールバス。その右前方に白バイが衝突し、白バイ隊員は亡くなりました。運転手の片岡さんはその場で逮捕され、業務上過失致死罪で起訴されたのですが、この日、卒業旅行でもバスに乗っていた22名の生徒たちはみな、「急ブレーキなど感じなかった、バスは確かに止まっていた」と証言し、片岡さんを救うための署名活動まで展開していました。


事故直後の事故現場。片岡さんはこの直後逮捕された。

ところが、こうした具体的な証言は採用されず、裁判官は、現場にくっきりと残っていた約1メートルのスリップ痕をもとに、「バスが急制動をかけた」と断定。片岡さんは刑務所に入れられてしまったのです。

それから約1ヶ月後、兵庫県の加古川刑務所から私のもとに、1通の手紙が届きました。差出人は、片岡さん本人です。

私はこの手紙を読みながら、これまで本誌連載の中で取り上げてきたたくさんの「死人に口なし」的な事故を思い返しました。獄中からの片岡さんの訴えは、一方的な捜査で「被疑者」とされたまま亡くなったり重傷を負った彼らの叫びに重なるような気がしたからです。

以下、片岡さんからの手紙をそのままご紹介します。

『柳原三佳様　手紙遅くなり申し訳御座いませんでした。先日、十月二十一日には本当にありがとうございました。三佳さまには最初から最後までお世話になりどおしで、申し訳ない思いで一杯です。

十一月十一日に加古川刑務所に移送され、十二日からは入所指導訓練中ということで、手紙を書く時間もないほどあわただしく日が経ちました。二週間の訓練期間中に、規律とか節度等々、当所の仕組み、所内生活上必要な知識、諸動作、将来への正しい心構え等について、職員の方々から教育を受けているところです。真剣な態度で受講し、社会復帰に備えて毎日悔いのない落ち着いた収容生活に励みなさい。（原文ママ）

私もまだまだ不安な毎日で自分の置かれた場、立場というのでしょうか、現実をとらえることができません。どうしてこのような場所に居るのか、檻の中に居る自分がわかりません。二ヶ月、三ヶ月位たてば自分の置かれている立場が冷静に見えてくるかもしれません。

毎日、毎日、考えることは、残された留守宅の妻と娘、三匹の仲間の事ばかりです。

現実を受け留め、前向きに一歩一歩進まなくてはと思うのですが、今まであまりにも、皆様に大事にされ、温かい生活を繰り返していたツケがきたのでしょうか。人間一人になると弱いものですね。

今、実刑一年四ヶ月の判決を受け留め一ヶ月たちましたが、納得するような答えが出ません。初めての交通事故で、それも交通三悪（飲酒・スピード・無免）、そのいずれにもあてはまりません。そうでしょう、あの日、私は駐車場から国道上に出るため、右方を十分に確認し、右折するため、中央分離帯付近で停車中に起きた事故なのです。

残念な事に相手の方は亡くなりましたが、結果ではなく、事故前の事です。この事故は、運転中の注意が緩慢になり、一瞬の油断で起きたのです。私も過失がなかったとは言ってません。交通事故ですから。しかし、このように一方的に私の業務上過失致死、実刑一年四ヶ月で終わっていいのでしょうか。事故の原因を考えてみなくてはいけない。事実関係を調べ、何年掛かるかわかりませんが、このまま闇に隠すわけには行きません。私の残された半生は、事実を明るみに出さなければ、全国からの五万人の方々の署名、校長先生、引率の先生、第三者の証言者、そして当時バスに乗っていた二十二名の生徒達、この皆様方を裏切るわけには行きません。その為にも、これからも三佳様のお力を頂き、ご指導ご協力をよろしくお願いします。

今、唯一楽しみなのが、妻と娘との面会です。一ヶ月の間に三回も来てくれました。この加古川刑務所は遠いので手紙でやり取りするように言ったのですが、月に二回は来るということです。私事で申し訳御座いません。

最後に、三佳様のますますのご活躍を祈念いたしまして、乱筆、乱文失礼しました。

片岡晴彦

新 一瞬の真実

●取材・文―柳原三佳　●イラスト―吉岡昌諒

柳原三佳

やなぎはらみか
バイク雑誌の編集記者を経てフリーに。交通事故を主なテーマに執筆する他、TV出演、講演活動も行う。本誌や『週刊朝日』に連載した交通事故の告発ルポは、自賠責制度の大改正につながり話題を呼んだ。また検視や司法解剖に関する取材も精力的に行い、日本の死因究明のひずみを鋭く指摘している。最新刊『自動車保険の落とし穴』『焼かれる前に語れ』『交通事故被害者は二度泣かされる』など著書多数。自らも限定解除のナナハンライダーである。

高知白バイ事件・最新速報

検察審査会が高知地検の判断に「待った！」

刑務所から柳原三佳の元に届いた片岡さんの手紙。

勇気ある議決を下した高知検察審査会

この手紙を受け取ってからしばらくして、片岡さんの支援者から私のもとに、高揚した声で電話がかかってきました。

「ミカさん、聞いてください。高知検察審査会が、不起訴不当の議決を下してくれたんです！　さっき、高知のテレビがニュースで報じていました」

実は、片岡さんは刑務所に収監される前、「証拠隠滅」が行われたとして、高知地検に被疑者不詳のまま告訴していました。つまり、「事故の過失を片岡さんに押しつける目的で、バスの左右前輪の後部にスリップ痕様の証拠を偽造した」という訴えです。しかし高知地検は昨年9月、嫌疑なしとして門前払い。納得できなかった片岡さんは、高知検察審査会に「不起訴は不当だ」と申し立てていたのです。

2009年1月21日付の議決文には「本件不起訴処分は不当である」と明記され、その理由が次のように記されていました。

『議決の理由

1　被疑者事実の要旨

被疑者は、平成18年3月3日ごろ、高知県吾川郡（現高知市）春野町広岡中987番地1先道路上において惹起された申立人運転の大型乗用自動車（以下「バス」という。）と警察官が運転する大型自動二輪車との衝突事故による業務上過失致死事件に関し、申立人が走行中に衝突したと装い、事故の過失を申立人の責に及ばせる目的で、前記バス左右前輪の後部にスリップ痕様のものを偽造し。もって他人の刑事事件に関する証拠を偽造したものである。

2　検察審査会の判断

（1）検察官は、衝突現場の写真撮影報告書及び実況見分調書添付の写真及びネガフィルムを鑑定、分析するなどの捜査を行う必要があると思われる。

（2）検察官は、衝突現場にはバス車内の同乗者のほか野次馬等もいる中、ねつ造しうる状況ではなかった、という先入観を基に捜査の結論に導いているのではないか

（3）バスの同乗者などの供述も参考にする必要があると思われる。

（4）申立人が実施した走行実験による鑑定結果に対して、検察官は別の専門家による検証を踏まえ、反論を行う必要があるのではないか。

（5）被疑者を特定するための捜査を行った形跡が認められない。

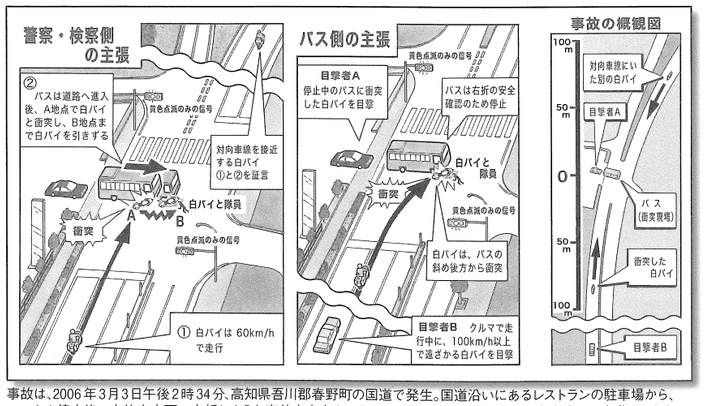
以上の様に、当検察審査会が指摘した事項は、検察官において、改めて検討したとしても、新事実の発見やその証明がなされるかどうか、期待されるところは少ないかもしれない。しかしながら、それでもなお捜査が尽くされていないという感を完全に拭い去ることはできず、検察官の判断は市民の感覚として納得できない。以上の点から、検察官の再考を求めるため、上記趣旨のとおり議決する。』

検察審査会は、一般市民11名で構成される組織です。その審査会が、市民の感覚で、検察官の判断に対し、「納得できない」と断じたのです。

議決後、片岡さんの支援者からは次のようなメッセージが発信されました。

「高知検察審査会、並びに11名の審査委員の皆様の良識と勇気に感謝いたします。私達支援者は、片岡さんの主張が初めて「司法」に認められた思いがします。そして支援者の皆さん。ありがとうございました。2月から、支援する会は「再審請求提出」に向けて、具体的に動き始めます。しかし、その道のりはまだまだ険しく、これからも皆さんのご支援が不可欠です。片岡晴彦さんの支援をよろしくお願いします」

検察審査会が不起訴不当と議決しても、必ず再捜査され、起訴されるとは限りません。しかし、今回の結果は交通冤罪に苦しむ人たちにとっても大きな後押しになることでしょう。引き続き、取材を続けていきたいと思います。



事故は、2006年3月3日午後2時34分、高知県吾川郡春野町の国道で発生。国道沿いにあるレストランの駐車場から、いったん停止後、土佐市方面へ右折しようと交差点中央まできたスクールバスの右前角に、右方向から直進してきた高知県警交通機動隊の白バイが衝突。運転していた隊員（当時26）が死亡した、というものだ。